

# 津山恵子の NY発 グローバル随想



## モノの グローバリズムの終焉

イラスト・題字：長峯亜里

2018年のシリーズ「グローバル随想」はニューヨークから。様々なメディアを通じてアメリカを発信し続けるジャーナリスト、津山恵子さんがお届けします。

### ニューヨークの北千住

ニューヨークに住んで14年超になる。数年前から、ファストファッションや百貨店など小売量販店は、長い時間をかけて淘汰<sup>とうた</sup>される……という予感があった。それは、さらに大量にモノをグローバルに調達し、大量に消費するという「モノのグローバリズム」にも大きく影響するという予測にもつながる。

予感を強めたのは、私が、近所の「ミレニアル」世代、つまり1980～2000年代に生まれた若者と接するチャンスに恵まれているからだ。ミレニアルは、米国の消費者で最大のシェアを占めるに至っている。

私は、ニューヨーク市のクィーンズ区という移民地区に住んでいる。人々がニューヨークという思い浮かべる摩天楼風景とは程遠く、戦前戦中にできた低い煉瓦<sup>れんが</sup>造りのアパートが連なり、建物の階段には老人が座って世間話をしながら、通りで遊ぶ子どもの面倒を見ている。日本の友人には、マンハッタンが赤坂・銀座なら、クィーンズは北千住だと説明している。

私が住んでいる通りは、プエルトリコ人を中心

としたヒスパニックの通り。すぐ隣のブロックからは東欧からの移民地区になり、ポーランド人のソーセージ屋や惣菜屋が点在する。その数ブロック先はイタリア系とドイツ系となる。

一方で、この地区はブルックリン、つまり急速に都市化が進み、おしゃれなレストランや壁画アートを見にくる観光客が押し寄せるスポットにも接している。つまり、私のご近所は、都市化の波が押し寄せる防波堤のようなところにある。

当然、移民だけではなく、家賃が安いアパートを求める白人のミレニアルが増え始めた。アーティスト、ライター、俳優とはいうものの、生活費のためにバーテンダーや事務職をしている者、失業中のエンジニア、マンハッタンで就職しているが初任給ではマンハッタンに暮らせない新卒社員などだ。

### 個性重視のミレニアル世代

彼らのライフスタイルは、「ヒップスター」と呼ばれる。読書、ニュース、音楽、映画に詳しく、バーで読書会や映画試写会を開いたりして、知的水準は高い。タトゥーがファッションの一部で、ひとひねりあるTシャツやジーンズ、「ビニー」という毛糸<sup>ひげ</sup>の帽子を被り、男性は髭<sup>ひげ</sup>を蓄えている。髭を剃った時が、仕事が見つかった時だ。

この世代は、マンハッタンにあるGAP、H&M、ユニクロ、Old Navyなどのファストファッションに